女子大生にみる肌色観

白肌と顔黒のはざまで

根強い白い肌志向

63%が「うらやましい」と思う

1999年11月25日

ポーラ文化研究所

村澤博人 / 高谷誠一

はじめに

昨年来、「色白」「顔黒」と肌色のことが話題となっている。流行の影響を一番受けやすい世代の一つである女子大生たちはどのように思っているのであろうか。そこで、肌色を中心に、化粧についてどのような考え方、価値観をもっているのかを探り、彼女たちのおしゃれ観の一端をのぞいてみることとした。

Ⅰ．目的

女子大生の肌の色に対する意識を多面的に調査して、彼女たちの肌色観を明らかにする。

Ⅱ．方法

女子大生を対象にアンケート方式（アンケート用紙は最後に添付）で回答してもらう方法を選んだ。首都圏にある女子短大、女子大、および札幌の女子大の学生を対象に、305名の回答を得ることができた。以下はその結果である。

Ⅲ．調査結果

Ⅲ－Ⅰ．肌色観について

a) 自分の肌色についての認識――「白いほう」と思っている人が多い

自分の肌色がどのような範疇に入るのか、次のような質問をした。「自分の肌色は平均的な肌色と比較して、白いほうか黒いほうか」と。ここでいう「平均的」とは、回答者の判断に任せている。

図1に示すように、「平均に比べて白い」と思っている人は、「やや白いほう」33％と「白いほう」８％を合わせて41％、半分近くであった。平均的＝ふつう＝「白くも黒くもない」と思っている人は33％、３人に１人。「平均に比べて黒い」と思っている人は、「やや黒いほう」18％と「黒いほう」3％を合わせて21％。「白いほう」41％の半分にすぎない。

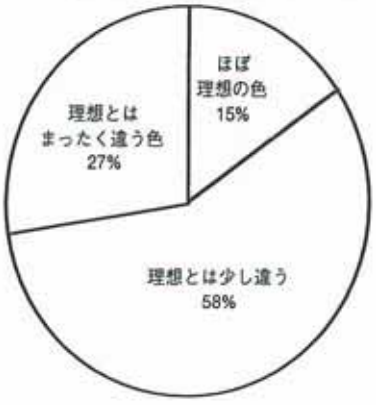
図１日本人の平均的な肌の色と比べて

b) 理想的な肌色と自分の肌色

「平均的な肌色」に対する自分の肌色の認識に続いて、「理想的な肌色」との比較をしてもらった。ここでの「理想的な肌色」はそれぞれの回答者の考える理想である。

その結果、図２のように、「ほぼ理想の色」とする人は15％で、約７人に１人が自分の肌色に満足していた。残りの85％の人は、「理想とは少し違う」「理想とはまったく違う色」と回答している。大部分の人が自分の肌色が理想とは異なると感じているようだ。

図２現実の肌色は？

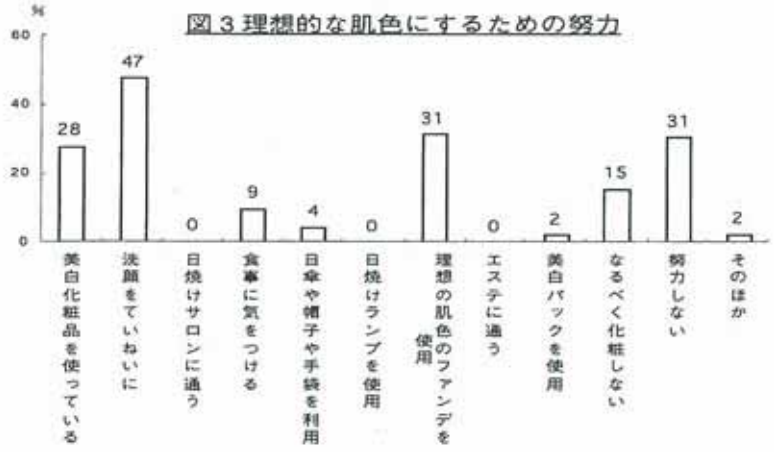


自分の肌色を「理想とは違う」と回答した人にのみ、さらに「理想的な肌色に近づけるためにしている努力」について聞いてみた。結果は図３のように、第一位は「洗顔をていねいに行う」で、47％がそう回答している。続いて、「理想の肌色のファンデーションを使用」「美白化粧品を使っている」の順となる。

その一方、特に努力していない人が31％いる。

女子大生にとっては、まず「洗顔」、つぎに「ファンデーション」と「美白化粧品」が理想の肌色を手に入れるためのボイ

図３理想的な肌色にするための努力



ントのようだ。

c)「日焼けしたくて焼いた」人は日焼けサロンも活用

顔黒の高校生や女子大生は珍しくない時代、彼女たちにとって日焼けはどんな意味をもつのだろうか。

過去一年間での日焼け経験を聞いたのが図４となる。積極的に焼いた「日焼けしたくて焼いた」人は全体の12%、８人に１人強の割合。少数だが、「日焼けしたくて焼いた」人は明確に存在した。

その一方、「結果として日焼けした」人は全体の60%いた。半数以上、３人に２人弱である。日焼けしたくないのに日焼けしてしまった人がたいへん多いことがわかる。

積極的に焼いた人と、結果的に焼けた人を合わせると、日焼けしたことがある人は72%、４人に３人近くとなる。

では、「日焼けしたくて焼いた」人はどこで焼いたのだろうか。図５に示したように、「海」37%、「日焼けサロン」で焼く人31%、「プール」17%、「ハワイ」６%の順となる。出かけた先で焼いた人は「海」37%と「プール」17%、「ハワイ」６%の計60%、半数を越える。一方、室内、すなわち「日焼けサロン」で焼く人が31%もいた。

図４ 過去一年の日焼け経験

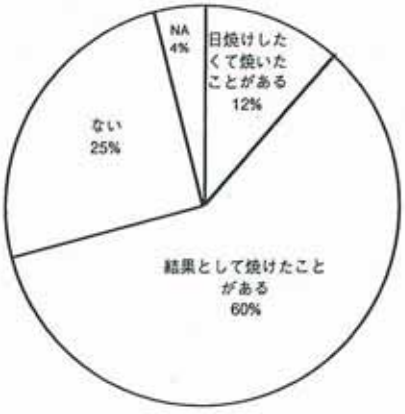
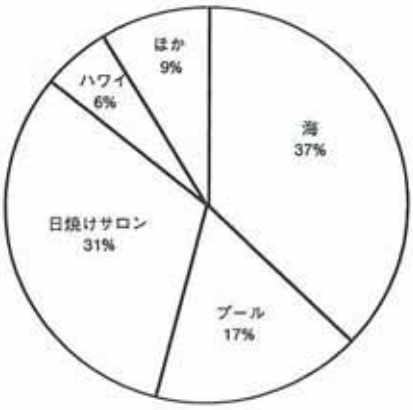


図５ 日焼けした場所



d)「日焼けの理由」は黒さを求めて

さらにこの日焼けした人たちに、日焼けした理由をフリーアンサーで聞いた。図６のように、「黒くなりたかったから」「引き締まって見える」「健康的に見せる」が主な理由である。

e)「日焼けのイメージ」には男女差がある

積極的に日焼けをしている人に日焼けのイメージをどう思うか質問した。結果は図７のように、「日焼けした男性はいい」と回答した人は46%、「日焼けした女性はいい」と回答した人は34%いた。「どちらでもない」という人が両者とも51%、ほぼ半数いた。逆に「いいえ」という否定的な意見は「日焼けした男性」については０%なのに対して、「日焼けした女性」は17%であった。全体では「日焼けした男性」は「日焼けした女性」にくらべて肯定的な回答であった。

図６ 日焼けした理由

f) 日焼け後は半数が手入れしない

「結果として日焼けした」人は全体の60%、３人に２人弱、いた（図４）。彼女たちはそのあとどうしただろうか。図８の「結果として日焼けした後」を見ると、トップは「そのまま、何も手入れをしないかった」人で50%いた。続いて「手入れをした」人は41%であった。

図7 日焼けのイメージ

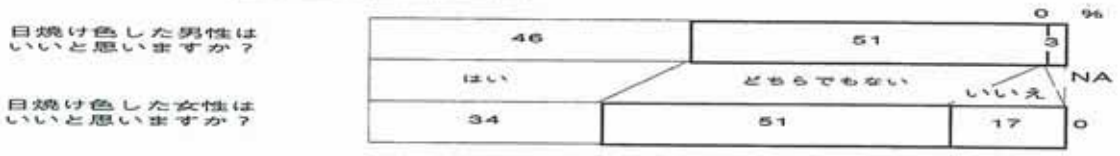


図8 結果として日焼けした後

図9 日焼けしなかった理由

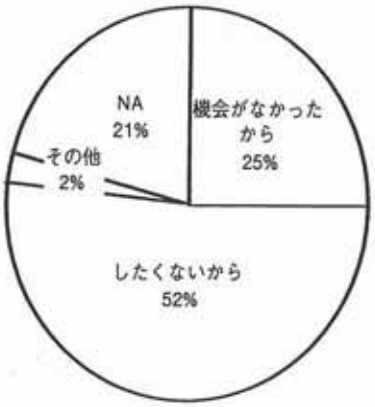
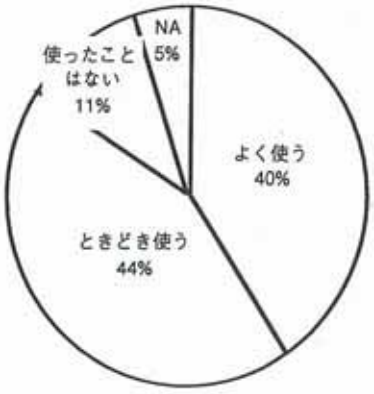


図10 日焼け止め化粧品の使用経験



g)「日焼けしない理由」ははっきりと「したくないから」

過去一年間での日焼け経験が「なかった」人が全体の25%いた（図4）が、どのような理由からだろう。

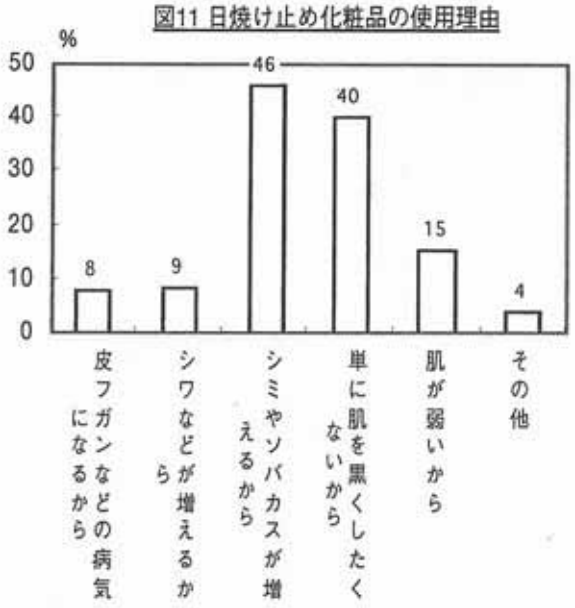
結果は図9のように、52%が日焼け「したくないから」、25%が「機会がなかったから」だという。日焼け「したくない」人の理由をフリーアンサーで聞いてみると、「シミ、ソバカスを避けたい」「皮膚が弱いなど」「白い肌へのこだわり、黒いのがキライなど」が上位を占める。それぞれ明確な理由であった。

h) 日焼け止めはシミ、ソバカス防止がトップ

念のために、全員に日焼け止め（紫外線カット）化粧品の使用経験についても聞いてみた。図10に示すように、「よく使う」が40%、「ときどき使う」が44%、と「使う」人は84%いる。逆に「使ったことがない」が11%、約9人に1人しかいないかった。日焼け止め化粧品はすでに必需品となっていることがわかる。

そこでさらに「日焼け止め化粧品を使用した理由」を聞いた。図11がその結果である。第1位と第2位がダントツに高く、「単に肌を黒くしたくないから」が40%、次に「日焼けすると、シミやソバカスが増えるから」で39%、と続く。女子大生に

図11 日焼け止め化粧品の使用理由



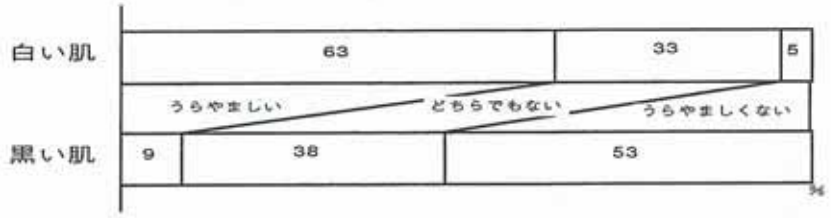
とって白肌がよく、「シミ、ソバカス」は大敵のようである。

i) 白い肌と黒い肌、どちらがうらやましい

日焼けに対するさまざまな意見を聞いてきたが、いったい、彼女たち女子学生は白い肌と日焼けした黒い肌のそれぞれに、どのようなイメージをもっているのだろうか。この点を探ってみた。

まずは、白い肌に対するあこがれ、あるいは黒い肌に対するあこがれを聞いた。その結果は図12である。白い肌に対しては、63%と半分以上の人が「うらやましい」と答えている。「うらやましくない」と回答した人は5%と20人に1人ほどである。たいへん「白い肌」に対するあこがれが強いことがわかる。

図 12 白い肌、黒い肌はうらやましいか

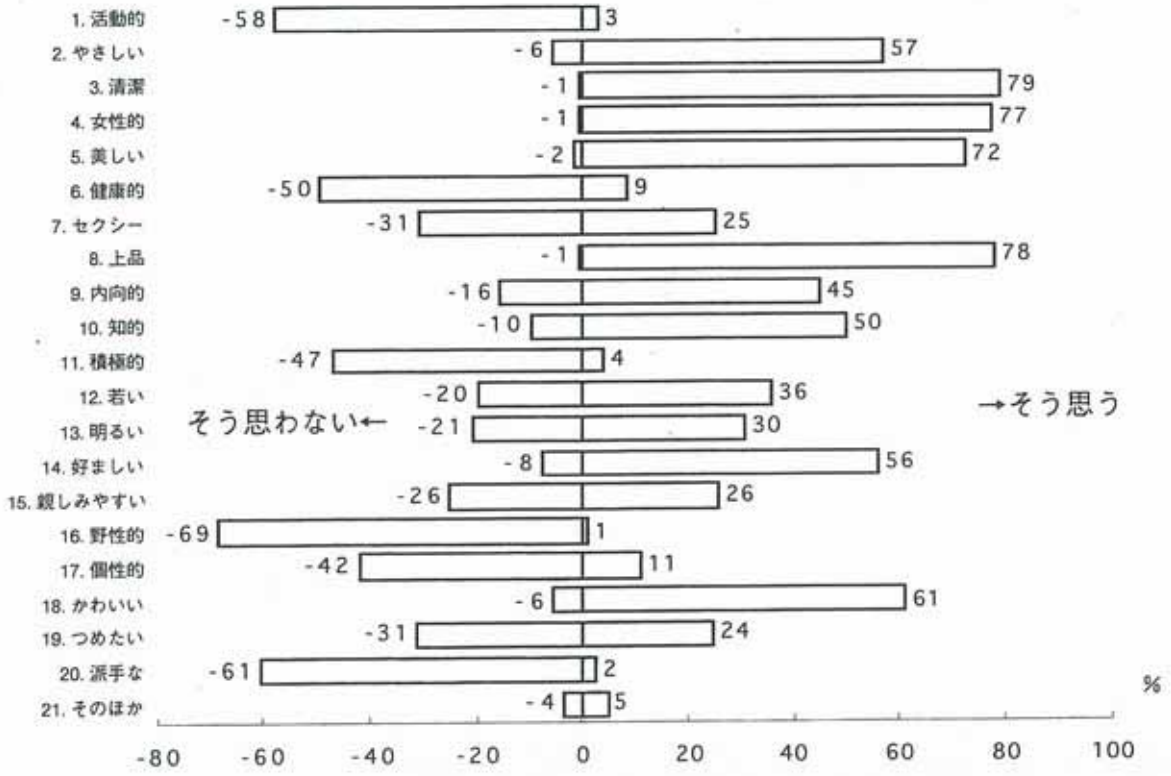


では、顔黒ともつながる「黒い肌」についてはどうだろうか。一番多いのが「黒い肌がうらやましくない」と思う人で、53%。半分以上の人が黒い肌には否定的。「黒い肌」が「うらやましい」と思う人は9%と少ない。ほぼ、10人に1人であった。

j) 色白と色黒のイメージは表裏一体

では、「白い肌」に対してどんなイメージを描いているのだろうか。次ページ上の20項目のなかから、そう思う項目とそう思わない項目とを選んでもらった。「白い肌のイメージ」の結果は下の図13のようになる。70%（214名）以上の支持を得ているイメージは、「清潔」「上品」「女性的」「美しい」の4項目である。さらに半数（153名）以上の支持を得ているイメージには「かわいい」「やさしい」「好ましい」「知的」が加わる。

図 13 白い肌のイメージ



1. 活動的	2. やさしい	3. 清潔	4. 女性的	5. 美しい	6. 健康的
7. セクシー	8. 上品	9. 内向的	10. 知的	11. 積極的	12. 若い
13. 明るい	14. 好ましい	15. 親しみやすい	16. 野性的	17. 個性的	
18. かわいい	19. つめたい	20. 派手な	21. そのほか（　　）		

一方、「そう思わない」を見てみると、支持の高いほうから「野性的」「派手な」「活動的」「健康的」「積極的」「個性的」となった。「そう思う」とはずいぶん異なることがわかる。

同様の質問を「黒い肌のイメージ」についても行ない、図14に示す結果を得た。「そう思う」項目を高い順にピックアップしてみると、「活動的」「野性的」「健康的」「派手な」「積極的」「若い」「明るい」「個性的」となる。逆に「そう思わない」については、「上品」「内向的」「清潔」「女性的」「やさしい」「知的」「かわいい」「つめたい」「美しい」「好ましい」となった。

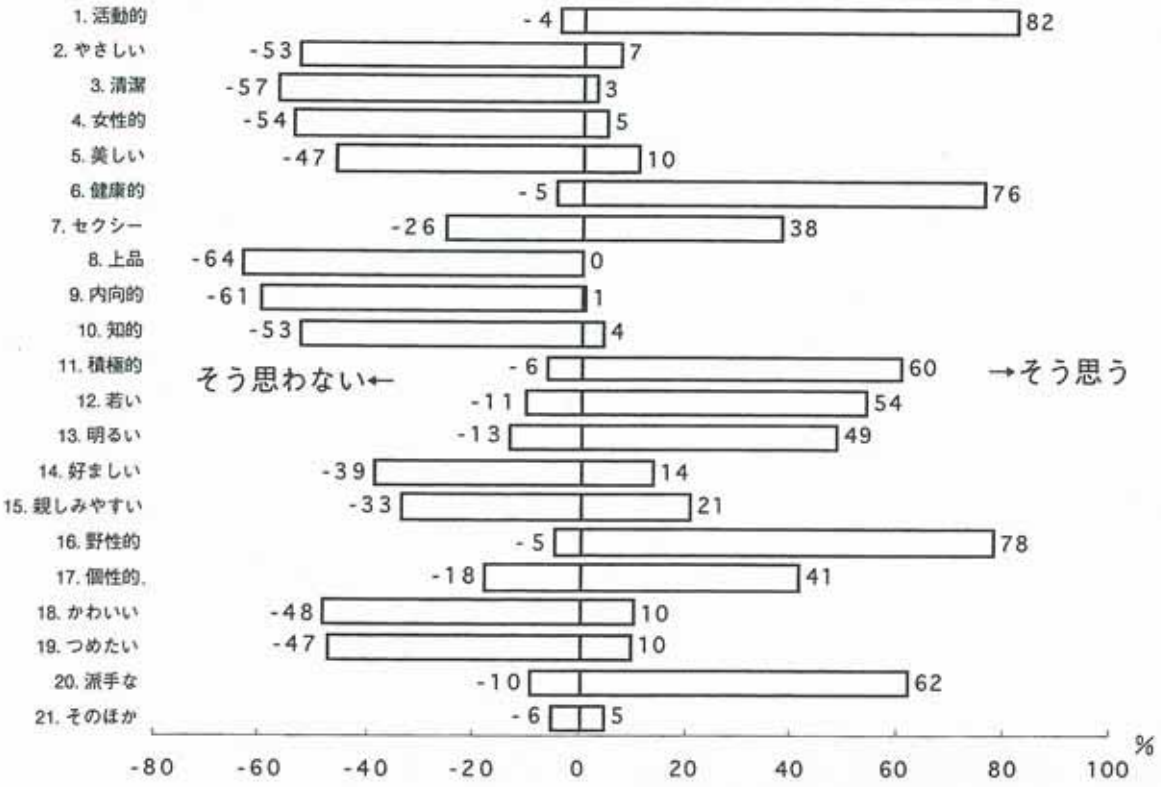
以上の「白い肌」と「黒い肌」結果を見比べると、「白い肌」の「そう思わない」イメージと「黒い肌」の「そう思う」イメージとがほぼ重なっている。両者はおよそ裏表の関係を示す結果であった。
まとめてみると、「白い肌」のイメージは、

「清潔」「上品」「女性的」「美しい」「かわいい」「やさしい」「好ましい」「知的」「内向的」「若い」

「黒い肌」のイメージは、

「活動的」「野性的」「健康的」「派手な」「積極的」「若い」「明るい」「個性的」

図14 黒い肌のイメージ



となる。肌の色によるイメージの違いが、明確に示された結果である。

図 15 白い肌の利点

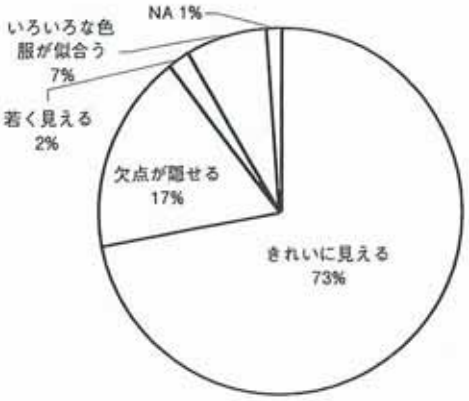
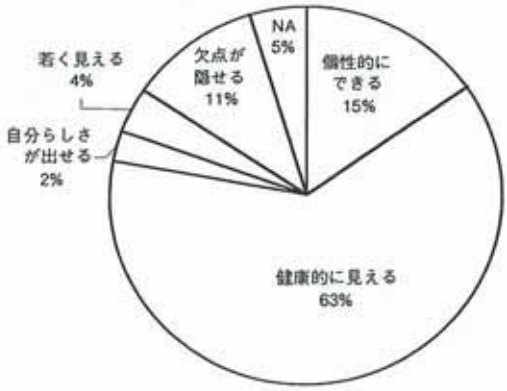


図 16 黒い肌の利点



日焼けした肌の色が似合う人
ベストファイブ

1位	安室奈美恵さん	71
2位	反町隆史さん	45
3位	松崎しげるさん	24
4位	木村拓哉さん	15
5位	羽賀研二さん	10

色白の肌が似合う人　ベストファイブ

1位	鈴木その子さん	33
2位	大石　恵さん	25
3位	松嶋奈々子さん	20
4位	松雪泰子さん	14
5位	及川光博さん	11

k) 白い肌の利点と黒い肌の利点

イメージの違いをさらに突っ込んで、「白い肌のもつ利点」と「黒い肌のもつ利点」を聞いた。

「白い肌にする利点」の結果は左の図15となる。「白くなれば」あるいは「白くすれば」、圧倒的に「きれいに見える」という結果である。「きれいに見える」が73%、4人に3人がそう思っている。次が「欠点を隠す」で17%、「いろいろな色の服が似合う」が7%となる。

もう一つの「黒い肌にする利点」の結果は左下の図16となった。圧倒的に「健康的に見える」が高く、63%、3人に2人がそう答えている。続いて、「個性的にできる」15%、「欠点が隠せる」11%となる。

l) 「白い肌」「黒い肌」の似合うタレント、有名人

本アンケートでは、きれいに日焼けした肌の色が似合うタレントや有名人は誰かを質問している（自由記入）。

「日焼けした肌の色が似合う人」の結果は、全体では270票の回答があった。一位には圧倒的に高い票数で、歌手の安室奈美恵さんが選ばれた。71票である。「彼女の持つ顔立ち雰囲気、歌う歌、ファッション、体型、全体のバランスが肌の色に合っている、自然に焼けている感じがする」という理由である。第二位は男性で、俳優の反町隆史さん、45票だった。理由は「野性的な人だから。日焼けして似合っているから」など。続いて松崎しげるさん、24票、「野生的な雰囲気がよりひき立つ、ほかの色が想像つかない」などの理由。さらに、木村拓哉さんの15票、「野性的、健康的だから」ほか。羽賀研二さんの10票、「肌が白かったら軟弱に見える」ほか。

さらに、梅宮アンナさんの7票、「ちょーかわいい、スタイルがよい、きれいだから」など、同じく7票の神田うのさん、「野生のヒョウのようにセクシー」ほか、同じく7票の工藤静香さん、「健康的」ほかの理由。飯島愛さんで6票、「日焼けしていないところを見たことがない」などの理由で、と続く。

日焼けした肌の色が似合う人は、このように全体にはっきりした結果である。男性に限らず女性が多いのに気づかされる。

では、色白の肌が似合うタレントや有名人は誰だろう。色白の結果は221票の回答があった。順位を見ると、日焼け色ほどはっきりした票差は見られなかった。

第一位は33票で、鈴木その子さん。「見ただけで白い。光あびてよく白く見せてる」などの理由で。続いて、大石恵さんで25票、「本当に色白でかわいいから、すごく透き通るようなきれいな白肌だから」ほかの理由。松嶋奈々子さんの20票、「清潔なイメージ、透き通ってる、上品な感じがするから」という理由から。松雪泰子さん、14票、「ほっそりとしていて卵のよう、肌キレイで白くても映える、透き通るような肌がきれい」などの理由。さらに、及川光博さん、11票、「王子様だから、色白のほうが合うから」ほ

か。鈴木京香さんで9票、「日本的美人、知的でかっこよい、絶対に色黒は似合わない」から。滝沢秀明さん、8票、「美少年、純情そうなので、かわいいイメージ」だからとなる。全体では女性が多かったことがわかる。

いずれにしても、以上は女子大生を中心とした結果である。違う世代の人に聞くと、異なる結果になったかもしれないが、日焼けの似合う女性や男性もいれば色白の似合う女性や男性もいる、という多様な結果だった。

Ⅳ. 考察

Ⅳ-Ⅰ. 肌色観について

a)「白」に対する思い

白い肌が優位とされる結果はいくつものアンケート結果の中に見え隠れしている。

「自分の肌色」が「白いほうと思っている人」が多い（図1）。

「理想とは違う」肌色の86％の人は、「洗顔をていねいに行う」「理想の肌色のファンデーションを使用」「美白化粧品を使っている」の順に努力していることになる（図2、3）。

白い肌に対しては、75％の人が「うらやましい」と答えている（図11）。

ではなぜ、これほどまでに「白肌」があこがれの的なのか。アンケート結果（図13）は、「白い肌」のイメージが「清潔」「上品」「女性的」「美しい」「かわいい」「やさしい」「好ましい」「知的」だからである。少なくともいまの女子学生の多くがそう思っているという結果である。

少し細かく見てみよう。最初の「清潔」はもともと白という色がもっているイメージである。けがれがない、よごれていない色、ほかの色に染まっていない、という意味であろう。また、80年代後半以降、若い男性のおしゃれのキーワードでもある。男性専用の洗顔料を使い出し、パックをしてキレイにする。毛深さは臭さのもと、脱毛して脱臭して、清潔さを表現する、という行動に、現代の清潔志向の基本を見ることができる。

「上品」は、歴史的に見れば貴族階級に通じる志向。なかなか「上品」を身につけることはむずかしいが。生まれつき、というイメージもある。欲しくても簡単に手に入れることができないイメージである。

「女性的」は男性的というイメージの裏返しでもあるが、「美しい」「かわいい」「やさしい」「内向的」にもつながるイメージ。どちらかというと男女平等化が叫ばれる以前の、古典的なイメージなのだろうか。男女平等化していくなかで、変化していてもおかしくない言葉であるが、いまの若い女子学生のあいだで通じるイメージのようである。

「好ましい」は色白に対してのあこがれ率を見ても理解できるだろう。色白が好ましいというわけである。「知的」は上品などとも関係しそうだ。

では「若い」はどんなイメージなのだろう。なぜ白いと若いのだろうか。それはまだよごれていない色だからである。一般に、年齢とともに、シミ、ソバカス、赤ら顔、シワなどが増えてくる。それらが増えてくると、それまでの「清」から「濁」にゆっくりと変化していくる。変化する前の若いときは「清」の色、白なのである。だから、「若い」肌は清＝白、というわけである。

このように見てくると、「白」のイメージは、ただ表面的にキレイなだけでなく、なかなか得がたいもの、という意識が根底にあるように思える。いわば希少性だろうか。白肌でいることがそれだけで評価される、ということでもある。こう考えると、やはり、「色の白いは七難隠す」が語っている「肌の白いのが最優先」する考え方がしっかりと存在している、ということができそうだ。

一方、「黒い肌」がもつイメージを考えてみよう。アンケート結果（図14）では、「活動的」「野性的」「健康的」「派手な」「積極的」「若い」「明るい」「個性的」なイメージがあることがわかった。

これらの言葉は、全体に共通して、アクティブで明るく個性的な印象を感じる。特に「活動的」「積極的」「派手な」がアクティブな印象の代表で、「健康的」「明るい」が明るい印象を、「個性的」「野性的」が文字通り個性的な印象を与えていることになる。

最後にここでも「若さ」が残る。「白い肌」でも「若さ」があったが、当然、同じ内容ではないはず。どう違うのだろう。「白い肌」の若さは「清」に通じるものがあったが、「黒い肌」はどのようなイメージが隠されているのだろうか。

ここで考えられるのは、「若い」肌がもつもうひとつの特徴に注目することである。それは白が膨張して見えるのに対して、黒が引き締まって見えることに関連する。ストッキングの色で経験ずみの人も多いだろう。いいかえれば、肌のハリを中心とした印象、肌の状態を見て感じた印象である。と考えると、ここでの「若さ」は引き締まってハリのある肌を若いイメージと考えることができる。

そういえば、肌が黒いアフリカ人のなかには、肌のハリを強調して美しく見せるために、肌にオイルを塗って艶を出す人々がいる。このオイルによる光沢は若さの象徴なのであろう。

さらに、白い肌の利点と黒い肌の利点をみると、「白い肌にする利点」は圧倒的に「きれいに見える」ことがはっきり出ている。続いて「欠点が隠せる」(17%)。「黒い肌にする利点」は「健康的に見える」がたいへん高く、続いて「個性的にできる」、「欠点が隠せる」(11%) となる。よく見ると、両者に共通して「欠点が隠せる」が出てくる。この質問は、最適なものをひとつだけという条件であるから、いくつでも複数回答可としたらもっと高い支持率があったと思われる。

「白い肌」は「七難隠す」で理解できるが、「黒い肌」が「欠点が隠せる」とは何であろうか。この点は質問項目に入っていないので、直接回答を得ることはできない。そこで、ふだん見聞きしている情報を含めて考えてみた。

ちょっと複雑な話となるかもしれないが、まず考えられることは、単純に白くないから、あるいはなかなか白くならないから、白くすることをあきらめて、黒くする、という理由である。黒くすることで「肌色が白くない」という欠点を隠せる、という解釈である。しかし、顔黒の女性たちを見ていると、それだけではないように思える。さらにどんな理由があるのだろう。

たとえば白くなったとしても、それですべてが終わるわけではない、というのが次の理由である。なぜ、白くなってもすべてが終わらないのだろう。それは、肌が白くなったとしてもそれだけでは満足できない、いや、さらに白さ以外のことが要求されるからである。つまり、こんどは白くなった段階で目鼻立ちまでもが評価の対象になる。

このように、正直何段階もの努力をしたところで、得られるものが少ないとしたら、どうだろう。「白肌」で勝負するよりも、むしろ違う方策を考えたほうが得、と考えてもいいのではないだろうか。

「白」という評価軸からはずれて、「黒」という別の土俵で自分勝手をする (=個性的)。その典型が顔黒である。「白」一辺倒になりがちなまわりに対して、大きな異議申し立てをして、自分たちの個性を主張していると考えることができる。その意味で、結果的には肌色の価値観の多様性を表現し、主張していると言えなくもない。「黒くたってステキなんだ」と語っているのだろう。90年代半ば以降に流行し、日本人の髪色観を大きく変えた茶髪の流行とあわせて、居直りとも見える新たな動きが始まっていることは確かだ。

顔黒にするために、「日焼けサロン」で焼く人が31%もいる。時間をかけてお金を費やして「黒い肌」を手に入れる。肌を黒くすれば、髪の毛の色が黒ではバランスがあわない。茶髪にして、口紅やアイシャドーまでも白めにしてその存在を強調する。スーパーモデルのナオミ・キャンベルの影響とも、アメリカの音楽の影響ともいわれる。それ自身は個性的であるが、顔黒の女性たちは顔黒でグループを作っている。一人一人の個性というよりは、仲間としての所属表示機能が優先しているように思える。顔黒という集団に属しているという表示の役割となっている点が、よくいわれるコギャルたちの集団性に共通している。ルイヴィトンのバッグと同じように、顔黒の顔があることが集団のアイデンティティであり他の集団とは細かいところで差別化を図っている、ということだろうか。

とはいえ、「日焼けのイメージ」には男女差がある。安室奈美恵さんがでて、かなり価値観を変えていったように思えるが、結果は従来の日焼け観がまだ残っていることを示している。